

中村 肇さん

■前兵庫県立こども病院院長



なかむら・はじめ 1940年尼崎市生まれ。神大教授、神大付属病院院長を経て、阪神北広こども急病センター理事長。新生児集中治療室(NICU)のネットワーク構築に取り組む。

子どもの急病対策

小児救急が破綻したのはなぜか。核家族化と少子化で、親は身近に相談できる人もなく、育児不安になり、軽症患者が時間外の病院小児科に押し寄せた。医療に市場原理が導入されたが、採算性が低いのが子ども救急だ。限られた人数でやっている上、常に最高レベルの医療が期待される。その結果、医師が過重労働になり、入院治療が必要な患者を扱う二次病院が音を上げた。小児科医だけでは時間外診療を支えられなくなつた。

昨年四月、伊丹市など三市一町と県が設立した阪神北広こども急病センターは、一次と二次救急の分担を明確にする目的がある。一次患者のニーズは生死の心配ではな

地域の皆で担う体制を

く、症状がひどくならないよう、親の苦痛や不安を解消することだ。域病院や救急隊とも話し合い、適切な搬送体制を整えた。センターの利用者は年間二

万五千三百五十人に上ったが、入院が必要だったのは2%弱で、二次救急、高度治療が必要な三次救急への振り分けができたと思う。周辺の二次救急の利用者は昨秋までに三十八割減り、各病院は入院患者の治療に専念できるようになった。

子どもの初期救急は医師の力だけでは変わらない。看護師や行政、地域が皆で担う体制が必要だ。(4月4日、神戸市小児科医学会の市民フォーラムで)
(まとめ・小西博美)